

能登半島地震炊き出し支援報告会 「能登の現状と長期的支援」



2024.1.20 一般社団法人SAVE IWATE

あまりにも過酷な現状

一刻も早い支援
＋
長期的な支援が必要

奇跡的なことも起きていた

最大震度5強以上を観測した地震の発生状況（2024年01月06日時点）

発生時刻	震央地名	マグニチュード	最大震度
2024年01月01日16時06分	石川県能登地方	5.5	5強
2024年01月01日16時10分	石川県能登地方	7.6	7
2024年01月01日16時18分	石川県能登地方	6.1	5強
2024年01月01日16時56分	石川県能登地方	5.8	5強
2024年01月02日17時13分	能登半島沖	4.6	5強
2024年01月03日02時21分	石川県能登地方	4.9	5強
2024年01月03日10時54分	石川県能登地方	5.6	5強
2024年01月06日05時26分	石川県能登地方	5.4	5強
2024年01月06日23時20分	能登半島沖	4.3	6弱

被害状況

建物被害



1/15 13:56
珠洲市内



珠洲市熊谷地区

震災前

googleマップのストリートビューより



被災状況



道路被害

道路は、いたるところで地割れ、
亀裂、陥没、土砂崩れが起きている。



道路事情

能登半島の先端、珠洲市に向かうには珠洲道路（広域的な幹線道路）、国道249が使える。

ただ、道路面が危険でスピードが出せないため、移動時間が通常の倍近くかかる。



七尾市中島地区 R249が片側1車線しか通行できないため、迂回路となっている脇道の細い道路を通過して珠洲方面に向かう。 1/12

7:09

インフラ被害

停電、断水が続く。断水の解消、下水道が使用できるまでには相当時間がかかるのでは。



珠洲市熊谷 下水道のマンホールが数10cm浮き上がっている。液状化が原因か

活動內容

【炊き出し場所】

1/14(夕)15(昼夕)16(夕食)
珠洲市正院町旧飯塚保育所

1/12(昼食)
穴水町旧甲小学校

1/13(夕食)
七尾市能登島地区コミュニティセンター
能登島生涯学習総合センター

【2次避難所支援場所】

小松市栗津温泉満天ノ辻のや
(輪島市深見から)

加賀市山中温泉お祝いの宿
(珠洲市三崎町雲津から)
みさきまちもつ

輪島市深見

輪島

穴水町

七尾

高岡

砺波

金沢

白山

小松

石川県

坂井

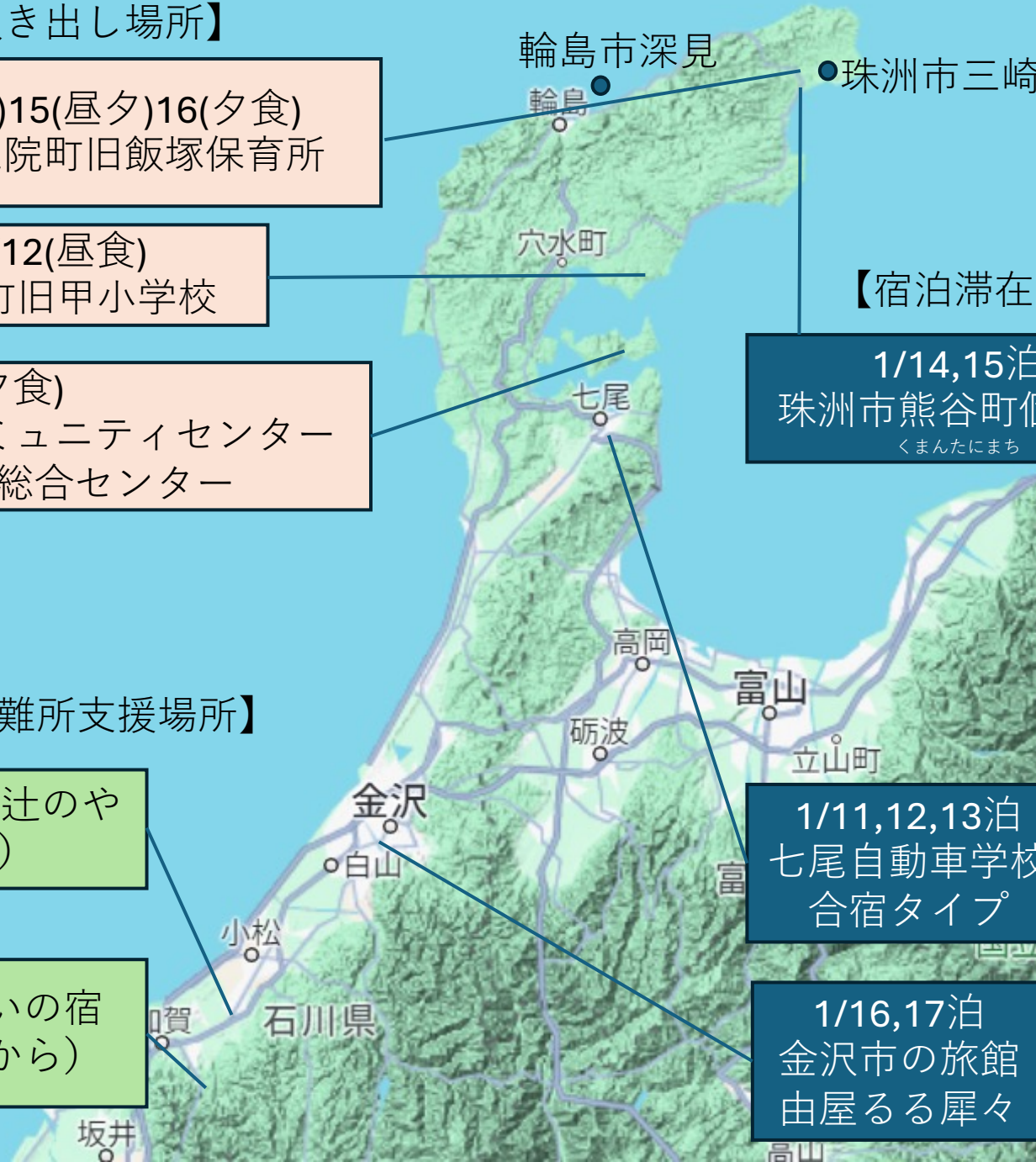
●珠洲市三崎町雲津

【宿泊滞在場所】

1/14,15泊
珠洲市熊谷町個人宅
くまんとにまち

1/11,12,13泊
七尾自動車学校
合宿タイプ

1/16,17泊
金沢市の旅館
由屋るる犀々



炊き出しのメニュー、食数

日付	場所	食数	メニュー	備考
1/12 (昼食)	・ 穴水町旧甲小学校	220	カレーライス、みそ汁、みかん、プリン、あたたかい煎茶・水	紙おしぼりトレー
1/13 (夕食)	・ 七尾市能登島コミュニティセンター ・ 能登島生涯学習総合センター	150	ごはん、クリームシチュー、みそ汁、みかん、あたたかい煎茶	紙おしぼりトレー
1/14 (夕食)	・ 珠洲市正院町旧飯塚保育所	60	鶏肉飯(ジーロウファン:台湾料理)、ミルクポトフ、ゼリー、みかん、あたたかい煎茶	紙おしぼりトレー
1/15 (昼食)		40	カレーライス、みそ汁、みかん、あたたかい煎茶	紙おしぼりトレー
1/15 (夕食)		60	白いご飯(昆布の佃煮と和ぐるみのせ)、豚汁、みかん、プリン、お菓子、あたたかい煎茶	紙おしぼりトレー
1/16 (昼食)		40	ハヤシライス、みそ汁、みかん、お菓子、あたたかい煎茶	紙おしぼりトレー

- ①おいしいもの
- ②あたたかいもの
- ③栄養バランスのとれたもの

食糧の配給ではなく、心があたたまる食事を提供

1/12 穴水町旧甲小学校 炊き出し

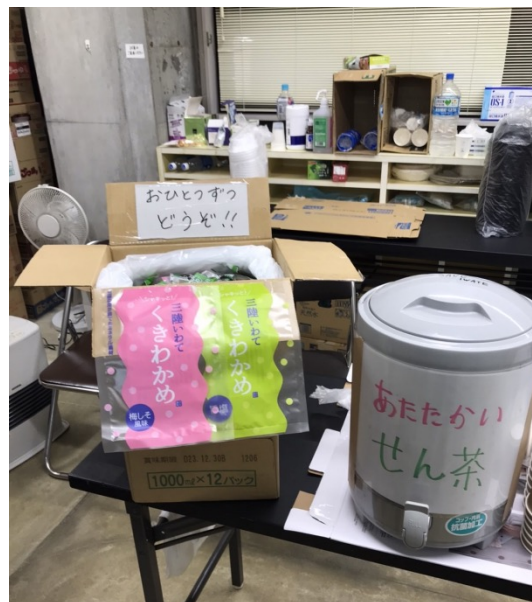


手前が調理場

左手奥が避難者が生活している体育館



穴水町での炊き出し 調理



配食

●2024/01/12 穴水町の避難所での炊き出し

- 1日ばかりで穴水町の避難所「かあさんの学校食堂」（旧甲小学校）で炊き出し220食のカレーライスを作った。普段炊き出しを担っている女性グループがちょっとでも休む時間ができるように一食だけでも代わりに作って一息ついてほしいという思いも込めての炊き出し。「初めて体育館でご飯を食べた（普段はキッチン脇で食べる）」とのこと。
- 避難所の人々から「手の込んだ料理は久しぶり」「ありがとう」と口々に（こんなに感謝されるのかと驚くほど）感謝された。カレーライスさえ貴重なものになってしまっていることが窺える。中には涙を流しながら食べたという人も。
- 自衛隊の給水車が来ていて水には困っていない様子だったが、給水車から水をくんだ大容量のポリタンクを運んだり大鍋を運んだりするので調理作業は本当に大変な肉体労働で、一食だけなのに調理・配食・片付けまでで6時間かかった。これを毎日やっている人たちには頭が下がる。
- 本来は七尾市から1時間強で行けるところ、道中崩落したりひび割れたりした道路、斜面が崩れて片側しか通れないところがいっぱいあって大渋滞。倍の時間がかかった。
- お勝手がわからず、母の日につたない孝行をしようとする子供みたいになってしまった部分も否めない（それでも、感謝された）。
- ラップを敷いたタッパーにカレーを入れたり、限られたお湯で洗い物をしたりする。
- (盛岡で)限られた水を上手に使う練習をするのも良いかもしれない。

[トピック・所感]

- 普段は被災者に主体的に動いてもらうことを目指しているため、被災者から「自分でやるよ」という申し出に対して「やらなくていいよ」とは言わないものの、今回はちょっと違うのかなと思ってハッとした。
- 「泣きながら食べた」という人もいた。こんなに感謝されるのかと驚くほど歓迎された。
- 避難者の「自分たちまで被災者みたいな生活なくて良いのに」という言葉が印象に残っている。
- 被災者より「珠洲では特に、同じようなラーメンやパンといった簡便食品ばかりだから、カレーライスなど手の込んだ食事を作ってあげると喜ばれると思う」

●2024/01/13 七尾市・能登島での炊き出し

- 能登島コミュニティセンターで**150食**のクリームシチューを作った。ここの避難所では（少なくとも**9日**以降は）夕食は企業（ほっともっと、すき家など）や支援者が入っている。手の込んだ温かい料理を届けたいと思いを込めての炊き出し。被災者から「当事者になるとわかる。今は温かいご飯が本当にありがたい」。
- 能登コミュニティセンターに向かう途中にある、和倉温泉運動公園テニスコート（能登島）に災害廃棄物仮置き場が設けられたことで大渋滞。一時は定刻までに到着するのが危ぶまれた。
- コミュニティセンターには仮設トイレが**6つ**設置されていた。
- 診療所が入っているコミュニティセンター。感染症には一層気を遣っている。居住スペースには避難者以外立ち入り禁止。
- 「ひよっこり温泉 島の湯」に無料で入ることができた（要・時間指定整理券：**500枚/日**）ため、出発後初の入浴となった。
- コミュニティセンターより高いところにもう一つの避難所能登島生涯学習総合センターがある。そこまでできあがった料理の半分を鍋に入れて軽バンで運ぶ。料理がこぼれないよう2人がかりで鍋を押さえてゆっくり走る。

[トピック・所感など]

- 避難所には高齢者が多く、ただでさえ多く食べられないところ、「これと言って身体を動かしていないから」と、遠慮しているのではなく本当にあまり食べられないことを痛感。足りなくならないようにと多めに作るとたくさん残ることになる。

●2024/01/14 珠洲市正院町での炊き出し

- 飯塚保育所での炊き出し。60食の鶏肉飯(ジーロウファン:台湾嘉義の料理)とミルクポトフを作った。シェフから避難者に向けて台湾とのつながり、台湾の小学生が考案したレシピであること、小学生が近々募金を始めることなどが説明された。
- 水野さんの知人であるTさん宅に泊めてもらえることになった。周囲の家屋は軒並み倒壊。向かいの方は死亡。
- 道路状況悪く、友人曰く来ない方がいいとのこと。
- スタック対策は入念に。雪道で立ち往生してしまったら大迷惑になる。
- スタック時の脱出用に役立つ資材をホームセンターで購入。タイヤの空気圧のチェック。
- 途中で寄った道の駅でトイレが流れないトラブル発生。持参していた水タンクから水を注ぐことで流した。
- 途中でレンタカーの軽バンから異音・ノッキングが発生。レンタカー屋に連絡してやむなく珠洲市宝立町の営業していないファミマに置いてきた。

[トピック・所感など]

- 当初は七尾から通うことを検討していたが結局4時間程度かけて珠洲市に到着。七尾市から通うのは絶望的。
- レンタカーのトラブルにより車中泊できる車が一つ減ったため、Tさん宅に泊めてもらえることになって本当に助かった。レンタカーは整備不良があきらかになったので、後日返金されるとのこと。
- 帰ってからもバケツ等でトイレを流す体験をしようと思う。
- トイレの回数を増やさないようにとこちらに来てからずっとコーヒーを飲んでいない。
- 東日本大震災の時は多くの家屋が津波で流されたが、今回は壊すのも大変だろう。
- やはり高齢者が多いこともあり、あまり多く食べられないようだ。
- 避難所の広間では相撲など見て盛り上がっていた。
- 田んぼの中に大きな地割れを発見した。

●2024/01/15 珠洲市正院町での炊き出し2日目【昼・夕】

- 初めての一日2回の炊き出し。長距離移動がないこと、調理環境が昨晚から変わらないこと、食数があまり多くないこと（昼40食夕60食）であることなどから、負担感はそれほど大きくない。
- 昼食にはカレーライスを作った。シェフ特製のルウが好評でルウだけおかわりする人続々。スタッフも食べたが、確かに美味しい。
- 夕食は豚汁。昼に引き続き厨房を使えたので時間に余裕あり。
- この地域の家は多くが大正から昭和初期にかけて建てられた。家を建てること自体がステータスだったようなところもあり、「建てろ建てろで建てられた家が多い」（耐震性などは二の次であった）。倒壊した家に戻れば気が滅入る。避難所にいた方が気が紛れる。（家が全壊した70代男性避難者の話）
- 熊谷地区のあたりも、同時期に建てられた家が多い
- 外で倒壊した家屋の廃材を使って焚き火をしているグループ。心なしかピリピリしている様子。避難所内にいづらいのかもしれない。
- 昨日の料理で余った鶏肉2kgを使って焼き鳥にして付けることに。先述の焚き火グループにタレに漬け込んだ鶏肉を渡して焼き鳥を作ってもらい、小鉢に盛って全員に提供した。心なしか笑顔と交流が生まれた様子。
- 談笑しながら食事する様子が多く見受けられた。

[トピック・所感など]

- 近くのドラッグストアにバターの買い出しに行った際に、アルコールスプレー類は売り切れ。売り場は混雑し、レジには長蛇の列。冷凍ショーケースが傾いている。
- 「最終日は時間に余裕がある。手が空いた人はぜひ避難者と話をしてほしい。（14日現在）食べるものには困っていないところに我々が来る一番の意義は『慰問』にこそある。避難者は、ちょっと話しかけるだけでどンドン話（イカ釣り漁船の漁師をやっていたこと、新聞ごとの違いなど）をしてくれるくらいには話をしたがっている。我々が岩手から来ていることをみんな知っていて、東日本大震災の時に支援してくれたことへの感謝の気持ちを伝えることで被災地に少しでもパワーを与えることもまた、我々のミッション」
- 炊き出しは作ればいいというものではなく、避難所生活ではなかなか食べられない「手の込んだもの」であることが重要だとシェフの姿勢から学んだ。実際、鶏肉もわざわざ骨付き肉を買って骨を外して出汁を取ったり、普段口にしないような中華素材を揃えて本場の味を作ったりするなど手の込んだ作り方をした。作るだけならいくらでも楽しむことはできるが、食事で感動を与えることが大事。

七尾市の宿泊場所



七尾自動車学校の宿泊施設、電気はきているが断水が続いている
風呂はなし
トイレ大は黒いビニール袋と凝固剤、トイレ男の小は周辺の茂みで

能登で起きていた奇跡

ビニールハウスで避難生活 珠洲市岡田





集落内には避難所に使えるような建物はなくなってしまい、観光いちご園のビニールハウスを開放して避難所に。
地域の人たちみんなで知恵を出し合い、残っている資材を使ってサバイバル生活を送っている。

ビニールが2重になっていて、ハウスの中は意外と暖かい。畳を敷き詰めて寝起きしている。隣のハウスは炊事と食事場所



携帯発電機がフル稼働。洗濯機もある



倒壊した建物の木材で湯沸かし



沢水を引き入れるため、コンテナを並べてパイプを引き、即席の簡易水道が作られていた。水は豊富



薪で沸かす風呂も自力で整備。シャワーが欲しいということで浴槽の湯を洗濯機に組むポンプを購入して提供



観光農園のトイレをそのまま活用。水はバケツに貯めておいて流す

●2024/01/15 珠洲市 【皆口イチゴ園ビニールハウス避難所】

- 地区の集会所が倒壊し、やむなくビニールハウスを避難所にしている。
- ティッシュや除菌シートの類が不足している。一方、飯塚保育所の物資が潤沢にあったので、その中から一部をイチゴ園避難所に届けた。
- 当初、ビニールハウス避難所にも配食予定だったが、新型コロナウイルスの発生により外部の人間の立ち入りを制限。配食予定がキャンセルになった。
- （ある被災者の話）現状、全員分の仮設住宅ができるまでは集落での移転は考えていないとのこと
- 沢水からパイプで引いた洗い場が設置されているため、生活用水には困っていない。
- お湯は倒壊した家屋の廃材などを使用した焚き火で沸かしている。
- 仮設浴室が設置されている。浴槽もあり、入浴することはできるが、シャワーがない。バケツや柄杓で掛け湯をすることになるので、節水が難しくすぐにお湯がなくなってしまう。

集落まるごと2次避難を実現

輪島市深見町



道路が途絶し孤立集落となっていた輪島市深見町では、1/6と1/8に集落の住民や帰省者120人が石川県小松市の粟津温泉に集落ごと2次避難した。1家族4人は残った。

みんなが2次避難を決断するまでのドラマを説得に当たった佐藤克己さんから聞いた。

停電、断水、交通が遮断されているうえ、いつ余震で山が崩れてくるかかもしれず、命の危険にさらされている切迫した状況にあった。佐藤さんは集落の人たちに2次避難すべきだと提案した。しかし地域から離れがたい住民は猛反対で大激論になった。佐藤さんがいくら説明しても賛同は得られず、よそ者が何の権限でそんなことを言うのかと怒鳴り返される。佐藤さんは、今は避難指示ではなく避難命令が出ているとウソをついてまで口説いた。以前から佐藤さんと親しくしていた人たちは少しずつではあるが理解し始めてくれたものの合意にはとても至らなかった。

佐藤さんは最後の最後に開き直り、もうこうなったら私だけ避難する、あとはどうなっても知らないからあなた方で好きにしてくれ、と言った途端にみんなの考えがガラッと変わり2次避難を決断するに至った。

深海町から避難し温泉に落ち着いた人たちは、輪島の他の孤立集落に暮らす人たちに電話をかけまくり、早く2次避難した方が良くいと説得した。こうして輪島市内の孤立集落からの2次避難が進展することになった。



佐藤克己さん（写真左）
東京出身、輪島に移住し地域活動を行っている。NPO法人紡ぎ組理事長

これから必要な
支援

緊急支援

●避難所の現状

- ・パーティションの機材がない、あっても置くだけのスペースがない
- ・風呂に入れない、手洗いも不便で感染症が懸念
- ・食事は炭水化物中心に偏りがち
- ・自主運営で住民の疲労がたまっている

●避難所の課題と必要な支援

健康面、精神面で不安な状況にあり、災害関連死を防ぐためにも一刻も早い改善が必要

- ・避難所運営をサポートする経験豊富な人材を派遣する
- ・清潔なトイレ、入浴や洗濯ができる仮設の設備を設ける
- ・あたたかい食事を届ける

※支援が漏れがちな在宅避難者への支援に取り組むことも重要

短期的な支援（2次避難所）

● 2次避難所の現状

- 安心して生活できる場所に落ち着くことができた
- 洗濯機が欲しいが贅沢と思われたくないので黙っている
- 避難生活が長引いてくると、何もすることがないことが苦痛になる

● 2次避難所の課題と必要な支援

- 裁縫や編み物などで気を紛らわせたり、何かしらの仕事をすることで気持ちに余裕や張りをもってもらう
- 部屋にこもりがちにならないよう、みんなで何かできる機会をつくる
- 記録作成のお手伝い

避難者の方に三陸復興カレンダーを差し上げたところ、避難生活をしていると日付や曜日がわからなくなってくるのでちょうどカレンダーが欲しいと思っていたところと言われ喜ばれた。



中期的な支援（仮設住宅）

被災者の方々が仮設住宅・みなし仮設に入居

道路事情がある程度改善し、ボランティアの受け入れが本格化する段階

- 仮住まい生活に必要な物資の支援
- 新たなコミュニティづくりに必要な支援
- 収入支援、なりわい再生のための支援
- 生活再建にむけた支援
- 心のケアのための支援
- 募金活動

SAVEIWATEで取り組んできた

着物のリメイク、かご細工の手仕事も
参考にしてもらいたい



珠洲市正院小学校の校庭で仮設住宅の
建設が始まっている 1/15

長期的な支援

被災規模が甚大であり、復旧復興までには**5年10年**と長い年月を要するものと考えられる。

東日本大震災からの復旧復興を経験している岩手からは、成功例・失敗例を含めて能登に伝え活かしてもらうことが必要。

- コミュニティ再生の支援
- 産業再生の支援
- 心のケアの支援
- 被災者一人一人に寄り添い、支援漏れを防ぐよう災害ケースマネジメント手法の支援

東日本大震災の経験

復興ぞうきんプロジェクト

東日本大震災

復興ぞうきんプロジェクトのスタート

2011年 3月11日 東日本大震災発生

4月17日 つなぎ温泉愛真館に

ぞうきん縫いの材料を配置



5月 5日 チャリティ落語会で募金をした方に進呈

7月 「復興ぞうきん」発売開始

能登半島地震

避難後2週間。

針仕事で気を紛らわしてもらえたら…

- 東日本大震災被災者の方達と協力して用意
 - ・ 空き箱等を使った簡単な裁縫道具セット
 - 針・針刺し・ハサミ・糸通し・指ぬき・チャコペン…
 - ・ タオル、糸
 - ・ 老眼鏡
 - ・ 手づくり手提げバッグ

活動開始から13年

ぞうきん縫いとサロンで笑顔を紡ぐ



参加被災者数	のべ201名
製作枚数	174,000枚
支援金額（縫賃）	25,500,000円
紡ぎサロン回数	740回



人のつながり

現地とのつながり、きっかけ

SAVE IWATE代表寺井の大学の後輩、水野雅男さんが石川県出身で県内に多くの知人がいたことから、その知人を通じて避難所からの炊き出し要請を受けるとともに、宿泊滞在場所を紹介してもらった。



水野雅男さん

石川県白山市出身

金沢を拠点にまちづくりのコンサルタントとして長く石川県内で活動

現在は法政大学の教授で東京暮らし

地震の時は実家に里帰り中

三陸の人の気持ちを届ける

東日本の被災者の思い届けてください

明けない夜は無いです

誰かがいつも見ていてくれます

貴方を必要とする人がいます

…盛岡を出発する前、宝来館の女将さんからいただいたメッセージ…

三陸の復興はまだまだこれからですが

三陸と能登が一緒になって

復興に向かって進んでいきたい